

資本主義制度(資本主義は凡ての経済行為の最高目的を資本の増加)の行はるゝ限り、さうしても資本主義に絶つて我輩の労働を彼に提供し、その代りとして彼から「賃銀」なるものを受けて生活を営むより外に今の處、道はないのである。

而も我輩がその僅か許りの賃銀を得るためには少からの犠牲を拂はせらるゝのである。先づ我輩は懐しい故郷を見棄て、悪魔のやうな煤烟の雲霧く都會へ出て來なければならなかつた。其處には飯事遊びの昔の夢の跡もなく、耳を聳するやうな鐘の音や頭を牛のやうに白くする綿埃り借では鼻を衝く有害瓦斯……そして喧騒、不潔、惡臭の中に終日働かされ、疲れて家へ戻つても横町の路次の奥深く太陽の光も此處までは及ばぬといふ九尺二間の片隅に何の慰めがあ

らう、何の静けさがある、而し夫れも未だ善いとして此處も永く安住してゐる事もならで、何時かは「都合に依り解雇」を喰つて、町から町へ、工場から工場へ、山を越へ、海を渡つてさまよはねばならぬのだ。「行雲流水」とは寔に我輩等の眞の姿である。

併し我輩等の失つたものは只だに故郷のみではない。我輩等は皆一家の團圓をも犠牲にした。往昔自家自給經濟が行はれてゐた頃は一家擧つて同じ場所に同一の生産に従事する事も出来たが大量生産が行はれる今日となつてはそれも打毀されて、父は鍛冶屋へ母は紡績へ、姉は燻寸工場へ、弟は硝子工場へ、櫻の花のやうに散りちりになつて働かざるに出来るのだ。之れでさうして睦しい家庭生活が営まれやう。家庭は智慧と感情の籠造所であるといはれてゐるが、